



中野真備.『海を「視る」技術——インド
ネシア・バンガイ諸島サマ人の漁撈と環境認
識』京都大学学術出版会, 2025, ix+224p.

本書は、サマまたはバジャウと呼ばれる人びとのあいだで実施した、たぐいまれなフィールドワークの成果である。サマはインドネシアとマレーシア、フィリピンの3カ国にまたがって居住しており、その名はアフリカ研究者のわたしでも知っている。民族誌が現在よりも権威ある記録として通用していた時代、セイザーらが浩瀚なサマのモノグラフを著していたし、鶴見良行もフィリピンや東南アジアについて書くなかで、しばしばその人たちに言及した。京都大学にアジア・アフリカ地域研究研究科がまだ創設される前、人間・環境学研究科の学生だったわたしは東南アジア研究の学生ともしばしば交流しており、鶴見良行に薫陶を受けた長津一史とはとくによく議論した。彼もまた、日本のサマ研究の第一人者となった。

アジア・アフリカ地域研究研究科が所在している現在の稲盛財団記念館の場所には、当時、左右対称にふたつの建物が立っていた。北側は東南アジア研究センター（現 東南アジア地域研究研究所）が、南側はアフリカ地域研究センター（現 アフリカ地域研究資料センター）が使っていて、南側の建物に机を与えられたわたしを長津はしばしば夜更けに呼びだし、北側の建物にあった東南亭という部屋で遅くまで話しこんだ。わたしが酔いつぶれて記憶を失っても、長津はひたすらビールを飲みつづけ、山のようになるまで空き缶を積みあげるのだった。

それはともかく、長津が主として研究しているのはマレーシアのサマ、それに対して本書の舞台はインドネシアである。本書は副題にあるとおり、漁撈とそれに関わる環境認識に焦点を当てる。現在でも多くのサマが漁撈で生計を立てているが、20世紀には漁撈に依存する度合いが現在よりも高かった。それどころか多くのサマが船を住まいとし、国境をまたいで漁場まで移動し、その後は海

産物の買い手を求めて遠くの土地をさすらった。このためサマは「漂海民」「海のジプシー」などの別名をもつ。そうした特殊な生活環境にくらす人たちが、海底地形や海中生物についてどのような認識をもっているのか、読者の期待は大きく膨らむ。しかも調査地はインドネシアのスラウェシ島地域、正確にはその沖合にあるバンガイ諸島である。そこがどんな場所なのか、その人たちがどのような世界観をもっているのか。インドネシアに一度しか行ったことがなくとも、長津の影響を受けたわたしにしてみれば、胸が踊るような問題設定である。ひょっとすると、彼らはわれわれと同じ世界を見ている、われわれが思いもかけないような世界観をもっているのではなからうか。

本書の構成は次のとおりである。

序章 海を生きる人びとの世界

第1章 多島海を生きるサマ人の生活世界

1-1 バンガイ諸島タミレ村の自然環境

1-2 タミレ村 小史

1-3 タミレ村のサマ人の暮らし

1-4 サマ/バジャウという人びと

第2章 バンガイ諸島サマ人の漁撈活動

2-1 漁法と漁具

2-2 魚類

2-3 漁場

2-4 適漁期

2-5 ナヴィゲーション

第3章 海の民俗分類と空間的配置——手釣り 漁師の空間認識

3-1 海の空間分類

3-2 海の空間的配置

3-3 「面的」認識, 「線的」認識, 「スポット的」 認識

第4章 魚類・漁場・目標物の民俗分類

4-1 魚類

4-2 漁場

4-3 目標物

4-4 魚類・漁場・目標物の語彙の相互関連性

第5章 海を「視る」技術

目次をみるとやや平板で、市町村史の項目立て

のように錯覚してしまうが、調査方法には工夫がみられる。漁師自身に漁場図を書いてもらう「スケッチマップ調査法」を駆使しているし、図鑑を提示しながらの方名聞きとり調査もおこなっている。後者の調査で得られた魚名リストは長大で、15ページにもわたっている。なかなかの大作である。

わたしが調査したマダガスカル魚名と比較して、面白い発見もあった。たとえば166ページに述べられている *tanggiri* (サワラ属の複数種) は、わたしがマダガスカルで聞きとったヴェズ語の *dangiry* (魚種不明) にそっくりである。崎山 [2012: 227] は文献にもとづいてこれをヒメツバメウオとしているが、マレー語の *tenggiri* (ヨコシマサワラ) などふまえて、すべてが **tanjiri* というオーストロネシア祖語に由来するものだとしている。また163ページの *lamuru* (ヨロイアジの一種) も、ヴェズ語の *lajura* (ヨロイアジ属) にひじょうに近く、分類群もほぼ同一である。崎山 [同上書: 224] はこれをふまえ、**luguran* というオーストロネシア祖語を再構成している。

もうひとつ魚名に関して、本書では、152ページで水族館から提供された写真を用いて魚名の由来を説得的に議論している。また、133ページで海の空間認識を議論するのに、わたしが所属する国立民族学博物館の展示資料に言及するなど、読者にアクセスしやすい資料を用いて説明を展開している。こうした点も、著者なりの工夫であろうと感服させられる。すぐに人がまねできるものではない。

ただ正直に言わせてもらえば、わたしが憧れつづけたサマの人たちの世界観すべてがこの本に収められているとすると、ちょっと寂しい気がしないでもない。たしかに調査はゆき届いているし、まとめかたも申し分ない。わたしは現地を知らないから、ないものねだりをしているのかもしれない。それでもわたしは、この本に述べられてない「驚き」がもっとあるはずだと思ってしまうのである。

わたしがないものねだりしているのだとすれば、話はここで終わってしまう。しかし、たんなる不平不満で書評を終わらせないため、もう少しだけ書かせていただこう。与えられた時間のなか

で著者が精いっぱい努力したのはまちがいないが、その結果に対して、著者は満足しているのだろうか。

本書の「あとがき」には、新型コロナウイルス感染症流行のために著者が一時帰国したあとと再出国できず、本格的な長期調査をおこなわないままに時間が過ぎたことが述べられている。「一時」帰国の2年間、著者はフィールドノートを何度も読みかえしながら、それでも「かれらのことを何かとても整然とした言葉で説明しなくなかった」(p. 217) という。妥協しなくなかったのだろう。しかし最終的には、補足調査を含めた短い調査で本をまとめるという妥協をした。妥協に至った背景には、「かれらに何も返せない」(p. 216) ことに対する負い目や、研究者としての人生設計、さらにはパンデミックという不運のなかでとりうる最善の行動に関して、周囲の人たちとおこなった対話もあっただろう。わたしは、著者の決断を責めるつもりはない。ただ、短い時間でこれだけのことを考えぬいたことを踏み台として、驚くような世界をもっと読者に見せてほしいと思う。サマの人たちの協力があれば、きっと可能はずだ。

サマの人たちが協力するかどうかという問題とは別に、時間さえ与えられていれば、著者はもっといろいろな調査をするはずである。たとえば魚名の聞きとりひとつにしても、図鑑を示すのではなく、じっさいに水揚げされた魚を前におこなうことができる。そうすれば、名まえがわからない魚に対して人びとがどのような議論をするのか、知識の差異は年齢以外の要素にも由来するのか、そして子どもたちがどのようにして魚名を習得するようになるのかなど、多くの問いがすぐに浮かぶ。

そもそも、人びとの分類と生物学的な分類とが厳密に対応しないことは、著者もよく理解しているはずだ。本書における印象深い議論のひとつに、インドネシア語の海 (*laut*) と陸 (*darat*) の区分がサマ語の海 (*dilao*) と陸 (*darak*) の区分に対応しないということがある。初学者が混同してしまいそうなほど語形がよく似ているのは、共通の祖語をもつからだろう。サマ語のほうをしいて訳すなら、*dilao* は深い海、*darak* は浅い海となるようだ。こうした些細な事実には、サマの人たちが生きてきた環境のヴァナキュラーな構造化をみてとること

ができる。ふたつの言語体系や文化体系に対応のズレがあることを著者が意識してきたのなら、次の調査で著者がなにを課題とするかは、おのずから計り知れる。

もうひとつ、著者は気づいているかもしれないが、次の調査でぜひ深めてほしいポイントをあげておこう。自然のなかで生きる人びとの環境認識は、辞書のように構造化されたものではない。また、彼らは地図や写真のように正確な記憶を有しているようだが、それだけを頼りにしているわけではない。その意味で、著者が環境認識を論じる前奏として論じている「ナヴィゲーション」というテーマは、いったん終息した認識人類学の議論を再燃させつつある重要なテーマである。ナヴィゲーションがたんなる空間認識とちがうのは、それが知覚をともなった動きであり、動きをとおした知覚であるという点だ。ヒトが有している知覚はしばしば断片的なものだが、ヒトは動きを前にして無数の断片を統合し、知覚に意味を与え、その知覚の流れに沿うかたちで次の一挙一動をこなす。知覚と行動が同調しているからこそ、行為は環境に即したものとなるのである〔飯田 2024; 大村 2013〕。

著者はナヴィゲーションに関する論述をふまえて空間認識を論じているが、わたしであれば、空間認識を論じたあとでナヴィゲーションにとり組むと思う。ただしこれは、好みの問題かもしれない。著者は自由にやってよい。感染症流行から解放されたあと、著者はサマの人たちに少しでもお返しをしようと、突貫で調査をおこなったのにちがいない。しかし研究とは、そのように急いでやるものではない。読んだり観察したりしたあとは、頭のなかで整理していかなければまとまらない。地域研究が問いを解くための学問でなく、問いを見つけるための学問だとするならば、なおさら歩みを早めてはいけな。その意味では、ゆったりとしたテンポで展開する本書の議論は、地域研究向きなのかもしれない。とにかく、著者の次のステップとして、時間から解放されて自由な調査と思考を展開することを心より願っている。

(飯田 卓・国立民族学博物館)

参考文献

- 飯田 卓. 2024. 「探索と推論の限界心理学——アフォーダンス理論と関連性理論の架橋」『国立民族学博物館研究報告』49(1): 41–65.
- 大村敬一. 2013. 『カナダ・イヌイトの民族誌——日常実践のダイナミクス』吹田：大阪大学出版会.
- 崎山 理. 2012. 「マダガスカルのアーストロネシア系魚名」『マダガスカル地域文化の動態』(国立民族学博物館調査報告 103) 飯田卓(編), 209–240 ページ所収. 吹田：国立民族学博物館.

吉田航太. 『ゴミが作りだす社会——現代インドネシアの廃棄物処理の民族誌』東京大学出版会, 2025, vii+248p.

はじめに

吉田航太『ゴミが作りだす社会——現代インドネシアの廃棄物処理の民族誌』は、インドネシアの第2の都市、スラバヤにおける廃棄物対策、特に、住民参加型の廃棄物処理について、現地調査、聞き取り等を行い、過去の取り組みを含め、詳細にまとめたものである。著者の吉田航太氏は、東京大学大学院総合文化研究科の文化人類学コースの博士課程を修了し、2023年5月から静岡県立大学の助教を務めている。2016年にスラバヤの廃棄物・リサイクル関連の事業に取り組んでいた北九州市の企業に、調査を受け入れてもらったことをきっかけに、スラバヤにおける廃棄物対策について丹念に調査し、この本がまとめられた。

評者は、2014年2月25日から2月27日に、スラバヤで開催されたアジア3R推進フォーラム第5回会合に参加しており、スラバヤ市における廃棄物処理に関する発表を聞く機会を得た。同フォーラムは、日本の環境省が、日本における3R(リデュース, リユース, リサイクル)の取り組みを、海外にも紹介し、国際協力を進めるイベントである。2009年11月に東京で開催したのを皮切りに、1–2年おきに開催されてきた。スラバヤで開催された会議は、アジア諸国に加え、太平洋の島嶼国

からも参加者を得て、約500名が参加した。このフォーラムがスラバヤで開催された理由として、同市がゴミ銀行（再生資源を引き取り、通帳に記入し、必要な時に現金を引き落とす仕組み）やコンポストづくりなど、3Rに取り組んでいたためである。評者は、アジア3R推進フォーラムの終了後、廃棄物処理・リサイクルについて、スラバヤ市とパートナーシップを結んでいた北九州市をサポートしていた事業者の案内で、スラバヤのゴミ銀行、コンポストづくりなどの現場を見学させていただいた。

内容紹介

吉田氏の本は、主に、2016年から2018年の間でのフィールド・ワークをベースにまとめられている。1998年、スハルト体制が崩壊し、民主化が進む過程で、スラバヤでは、廃棄物処分場における火災の発生、その「ばい煙」による大気汚染といった問題がクローズアップされるようになり、住民が、廃棄物処分場への道路を封鎖するなど、廃棄物の不適正処理が、社会問題として認識されることとなった。吉田氏は、試行錯誤をしながら、取り組みを進めている段階に立ち会っていたと言えるだろう。

序章「廃棄物処理と現代インドネシアの民族誌」では、2010年以降に、インフラストラクチャーを対象とした人類学研究がなされるようになったこと、その背景には、科学的な知識や技術が、「社会や文化から独立した存在ではない」という考え方が広まってきたことが背景となっていると指摘している。また、廃棄物を対象とした社会科学の研究について概観し、衛生問題を生じる「ゴミ問題」に関して、「廃棄物処理インフラ」の重要性を強調している。廃棄物処理インフラには、行政の収集システムだけでなく、各世帯から行政の収集ポイントまで廃棄物を運ぶ収集人、インフォーマルな廃棄物市場なども含んでいる。捨てられたゴミはPETボトルや金属類などをより分け、収集人の収入となっている。また、仲買業者（ブグブル）が、回収人からリサイクルできる再生資源を買い取り、リサイクル業者に届ける形となっている。吉田氏は、スラバヤでの取り組みを、ゴミ問題に対する

試行錯誤の結果、現状のリサイクルできるものについては、回収が進んできたと指摘している。

第1章「スラバヤにおける廃棄物処理インフラ」では、スラバヤにおける廃棄物処理の歩みを紹介するとともに、インフォーマルな収集人について詳述している。収集人は、家庭からゴミを集め、リヤカーで、路上に設置されている中継所に持ち込むことで収入を得ている。中継所に集められた廃棄物は、収集トラックで廃棄物の埋立処分場に輸送される。中継所や最終処分場で、廃棄物から有価物が買い取られる。回収する人々は、プムルンと呼ばれている。プムルンは、狭義の意味では、回収人であるが、広義では、仲買業者（ブグブル）、中古の買い取り販売業者（ロンベン）を含む概念となっていると説明している。

第2章「民主化とゴミ問題の登場」では、2000年代前後に、スラバヤで、廃棄物処分場に運ばれた有機物からメタン・ガスが発生し、火災が生じ、付近の住民が呼吸器系の疾患を患うこととなり、危機的な状況となったことを取り上げている。住民は、埋立処分場につながる道を封鎖するなど、激しい抗議活動を行った。日本では、廃棄物を焼却する施設が建設され、公害対策も進んでおり、大きな問題とはなっていないが、スラバヤでは、1991年に廃棄物の焼却施設が導入されたものの、排ガス処理設備が設置されておらず、1998年には、稼働が停止したという。1990年代には、分別収集も試みられたが、分別の区分の解釈が明確でなかったことを指摘している。

著者（吉田航太氏）は、北九州市の企業（A社）がスラバヤで分別施設と堆肥化施設の建設、運営を行っていたことから、スラバヤでの調査を始めた。第3章以降は、スラバヤ市に滞在し、調査した内容に基づいた内容となっている。第3章「市場化の隠れた機能」では、まず、北九州市の日系企業が、ゴミの中継施設に建設した分別施設のプロジェクトと廃棄物の分別施設、堆肥化施設を作ったものの、プムルンが、価値のある廃棄物を集めているため、A社の収益が十分に上がらず、2016年8月に、スラバヤから撤退したと指摘している。またスラバヤ市は、プノウォ最終処分場の運営を、民間企業（X社）に委託したことにより、

ゴミ問題は、暫定的に解決されたという。

第4章「住民参加型開発の登場」では、2000年代のスラバヤでゴミ問題に取り組んだ3人の環境活動家（3つの環境NGO）の取り組みを分析している。一人目のヨディ氏（仮名）は、クプティ最終処分場の反対運動に取り組み、同最終処分場の閉鎖に貢献した。また、同氏は、地域住民や野菜卸市場で発生した食品廃棄物を集め、地元住民を雇用してコンポストを製造する取り組みを進めた。二人目のエコ氏（仮名）は、オーストラリアの援助機関のスタッフとして働いた際に、コンポストハウスの事業に関わり、堆肥化などの手法を学んだ後、NGOを設立し、ゴミの中継所でコンポスト製造に取り組んだ。市政府によるコンポスト工場にもつながっている活動である。三人目は、都市コミュニティー・エンパワーメント・センターというNGOのワヒュー氏（仮名）で、ヨディ氏の取り組みを参考に、分別堆肥化する施設を運営するようになった。これらのNGOの取り組みを含め、インドネシアでは、ゴミ問題に対して、住民参加型の廃棄物処理のプロジェクトが増加していると、著者は指摘している。

第5章「住民参加のパラドックス」では、有価値である再生資源を買い取るゴミ銀行、堆肥化（3種類のやり方）、ゴミを原料とした手芸品づくりについて分析している。著者は、これらの技術の特徴として、住民の参加を惹きつけている一方、処理の効率性が追求されていないと指摘している。各住民組織を対象に、住民参加型の廃棄物処理に関するコンテストを実施しており、少ない時でも数百の住民組織が参加し、スラバヤ市長から入賞者に賞金や商品が贈られている。多くの住民が参加するという形で「成功」している一方、手芸品に大きな需要はないと指摘している。

終章「ゴミが作りだす社会」では、理念的には、行政中心の廃棄物処理システムに市場化や住民参加が統合される姿であるべきだが、スラバヤでは、行政中心の廃棄物処理から、埋立処分場と住民参加型技術・環境コンテストが分離していると指摘している。

論評

評者は、2014年にスラバヤ市を訪問し、スラバヤ市の3Rに関する取り組みを見学する機会を得ていたが、吉田航太『ゴミが作りだす社会——現代インドネシアの廃棄物処理の民族誌』を読むまで、手芸品の製造など、ゴミの減量化に向けたスラバヤ市のさまざまな取り組みや課題については、十分に理解していなかった。

日本の廃棄物処理、リサイクルと比較すると、日本でも「分散」は、ある。例えば、スーパーなどで刺身などが販売されている際に使われている発泡トレーを製造しているエフ・ピコは、回収ボックスをスーパーに置き、使用済みの発泡トレーを消費者から回収し、発泡トレーを製造し、刺身などが接触するシートは、バージン材を使うといった取り組みをしている。容器包装リサイクル法では、自主的な回収・リサイクル・プログラムを許容しているのである。また、最近ではあまり見かけないが、古紙回収業者が、トイレット・ペーパーを引き換えに、新聞などの古紙を集めていた時代があり、行政が関与していないルートであった。

タイでも、インドネシアと異なった「分散」がある。タイのワンパニというジャンク・ショップは、古紙やプラスチック、金属、ガラスなど、リサイクルできる廃棄物の買い取り価格をインターネットに掲載し、市況をみて、買い取り価格を頻繁に見直す形をとっている。フランチャイズ形式で、店舗を増やし、2022年の時点で、2,300の支店がある。タイのみならず、ラオスやカンボジアなど周辺国にも進出している。タイのワンパニ社は、買い取り価格の市況をみながら決めているのに対して、インドネシアのゴミ銀行の買い取り価格は、価格を変動させず、低めの価格で買い取っている。売りに来た人に、値段が下がっていると文句を言われるのを避けるため、買い取り価格を低めにしているとのことである。

フィリピンでは、2001年から施行されているEcological Waste Management Actで、バランガイという最小行政単位（最低2千人、都市部では最低5千人）で、資源回収拠点（Material Recovery Facility:

MRF)を設けることが義務付けられた。複数のバランガイが共同でMRFを設置するケースもある。フィリピンは2023年から、プラスチックの容器包装を対象に、拡大生産者責任を適用することとなったが、2023年の目標回収率の20%、2024年の40%は、達成したと報道されている。順調に進んだ理由の一つとして、20年前から資源回収拠点の設置が始まっており、各地で設置されているため、回収する受け皿がすでに設けられていたと考えられる。

著者のまとめたスラバヤの取り組みをベースに、インドネシアの他都市、タイ、フィリピン、ベトナムなど、他国と、あるいは、インドネシアの他の地域と、比較することによって、新たな発見がでてくるのではないかと感じている。

(小島道一・日本貿易振興機構アジア経済研究所)

西尾善太、『人間の都市——マニラを鼓動させるジープニーとおっちゃん』花伝社、2025、371+22p.

本書はマニラの庶民の交通手段、ジープニーの運行を担う「おっちゃん」(オペレーターとドライバー)たちの「生の場所を共につくる」ためのポリティクスを通して、彼らの人間性を鮮やかに描き出したエスノグラフィである。著者は「暑苦しい記述」を目指したというのが(p.48)、その言葉通り、おっちゃんたちの汗とジープニーのオイルのにおいがページをめくるたびに立ち上ってくるかのようにであった。評者はアフリカ都市研究を専門とし、マニラを訪れたことはないが、活気に満ちたグローバル・サウス都市を思索する刺激的な旅となった。

本書の概要

本書は序章と終章に挟まれた三部構成となっている。

序章「マニラの多現実性——苛烈な分断と過剰な接続」では現代都市の絶望を直視しつつ、希望を見つけるという本書の道筋が示される。日下涉やマルコ・ガリドが描く分断都市マニラは、多現

実性を不可視化し希望をほとんど否定してしまったと批判し、マイナーな現実性を通して、分断を解きほぐし、一つの公共圏から議論を展開すべきだという。

第一部「ジープニーが語るマニラの歴史」は2章からなる。

第一章「近代都市の夭折」では人種隔離に基づくスペイン統治を撤廃したアメリカの近代都市統治に注目する。交通インフラと公衆衛生を重視する近代都市はコチェロ(馬車)を排除したが、人びとのニッチな需要に応える柔軟なサービスとして完全に消えることはなかった。インフォーマルな都市交通としてのコチェロの歴史は、現在のジープニーの姿と重なり合う。

第二章「ジープニーの脈々とマニラの新生」では市街戦で破壊され尽くされた後のマニラで、公共交通が生まれる瞬間を描く。軍から払い下げられたジープを使うインフォーマルな小規模事業者が交通の担い手となった。政府は小規模事業者にフランチャイズ(運営権)を付与したので、市井の人びとがつくり出した公共交通としてのジープニーがここに誕生した。

第二部「ジープニーと生きる場を拓き、育む」は3章からなる。

第三章「都市を鼓動させる力」ではジープニーセクターを駆動させてきた二つの生の様式、より良い生を求め、その情動に動かされて探し求める生の様式(*hanapbuhay*)とまわりの人間とそうした生を可能にする場所を共に作り出す様式(*kabuhayan*)に注目する。ジープニーの車両をもち、フランチャイズを取得し(*hanapbuhay*)、生の場を同郷者と一緒につくり出す(*kabuhayan*)。ジープニーの運行は車両を所有するオペレーターがドライバーに貸し出す、バウンダリーシステム(車両賃貸契約)によって支えられている。雇用契約ではないので、ドライバーは自己裁量で運行する。フランチャイズとして法的に認証されているが、バウンダリーシステムに依拠しているのでインフォーマル性を帯びるのである。

第四章「ケアがつくり出すインフラと生」ではジープニーという交通インフラがどのようにメンテナン

「目には見えない、けれど私たちの社会の基礎となる構造物を指す。可視領域の外にあるインフラを支えている人びとは、いわば、基盤の基盤のような存在である」(p. 155)。ジープニーの車両は脆弱だが耐久性があるという矛盾を有する。中古部品を手作業で組み合わせた車両は壊れやすいが、柔軟に修理が可能だからだ。ジープニーの耐久性はアラガ(メンテナンス・修理)というケアが前提となる。ドライバーやオペレーターだけでなくエンジニアや部品屋など街全体の人びとがケアに参加し、生の場を共につくっているから、ジープニーは止まらないのである。

第五章「生を表現する車体のグラフィック」ではジープニーの車体に描かれたグラフィックに注目する。ジープニーは大衆の表象として現代アートの題材となってきたが、あくまでも眼差される側だった。一方でジープニーの車体には、おっちゃんたちの生が描かれる。家族であり、夢であり、願望だ。車体は「取るに足らない」人びとの自己表現のキャンバスとなった。

第三部「否定された者たちのポリティクス」は4章からなる。

第六章「スクラップ・アンド・ビルドし続ける近代」ではドゥテルテ政権が、交通インフラの改善を優先事項に掲げて「ビルド!ビルド!ビルド!」の掛け声のもと実施した、強権的なジープニーの近代化事業を描く。これはジープニーのドライバーやオペレーターにとって車両の廃棄、新型車両の購入の義務化、フランチャイズの剥奪を意味する。無主の領域をつくり出し、「略奪による蓄積」を仕掛けるための、国家に従順ではない自律的な存在に対する戦いであった。

第七章「おっちゃんたちのポリティクス——ストライキという『現われ』の形式」では近代化事業によって潰しにかかれたジープニーのおっちゃんたちの抵抗を描く。否定された者たちの政治、承認されない人間による政治は、インフラポリティクス(底流政治)という「政治を可能にする必要条件」をめぐる政治である。いかに公共圏で彼らの発言や抗議活動が「現われ」を可能にしたのかを解き明かす。交通ストライキは抗議行動と運行停止で構成されるが、食べ物と「届く言葉」、

ダンス・ミュージックといった柔らかい力が効果的で、これらが100%交通麻痺を成功に導き、現われの政治を実現させた。

第八章「パンデミックによる都市の停止、死にゆくジープニー」では新型コロナウイルスのパンデミック下の強力なロックダウンにより弱体化したジープニーセクターを描く。フィリピンのパンデミック対策の特徴は軍を動員したモビリティの管理だ。10万人のドライバーが無職状態となり、パンデミックが収まった後も、なかなかドライバーは復帰できなかった。「ジープニーは死んだ」かに見えた。

第九章「『私たち』が望む都市へとつくりなおす」では、新しい様式のストライキに注目する。SNSを活用し、ハッシュタグで拡散して人びとを動員した。これによって都市で生きる「私たち」による、より良い交通とモビリティの希求としての連帯の意思と政治主体が生まれた。ジープニーセクターの弱体化は通勤者にとっても交通手段の減少を意味したので、彼らも政府に不満を持っていた。そこで著者は媒介者に注目する。Manibela(ハンドルの意)はオンラインを使う新しいジープニーの政治組織であり、代表者はかつてグローバル企業につとめていたエリートだった。通勤者グループ「Komyut」もまた通勤者が政治主体となった新しい出来事だった。ジープニーセクターと通勤者が結びついたことで、ジープニーとともに人びとが暮らしやすい都市を実現するという「真の近代化」を目指し始める。

終章「『人間の都市』宣言」では、西洋近代の画一的な人間性を基準とする都市概念に抗するため「人間の都市」を描くと高らかに宣言する。特定の人間性が支配する都市のなかで、別様な「人間らしさ」が育まれてきたことを証明する意義は大きい。

コメント

評者はマニラ以上に分断された都市である南アフリカのヨハネスブルクを長年、研究してきた。そこでは人種だけでなく、市民的価値観による新たな分断(ネオアパルトヘイト)が生まれている。著者が批判する日下渉の研究の影響も受けながら、

南アの都市の救いようのない分断構造を明らかにすることに力を注いできた。これはポストアパルトヘイトのディストピアを描くには不可欠であったと同時に、弱者の創造性や起業家精神を過度に強調するポストモダン人類学のエージェンシー論が、容易に揺らぐことのない構造的不正義を強化してしまうのではないかと懸念からであった。ただ、評者のこれまでの研究では生き生きとした人間の姿を十分に描ききれず、絶望感ばかりが残った。最近、これまでとは異なるアプローチをとり、希望が見いだせる研究へと転換しようと模索している。その意味でも本書からの学びは大きかった。多現実性、すなわち「支配、疎外、排除、抑圧といった現実とともに人間の創造性を映し出す現実もあるのだという都市の多面性を示す言葉」(p. 22)から「人間の都市」を描くという挑戦に勇気づけられた。

マニラだけで4.5万台（非公式には7～8万台）、フィリピン全土で26万台のジープニーが駆け巡っているという。ジープニーは、まるで血液のようにマニラを循環している。交通を止めないためにはジープニーのケアが必要で、「関係性につらぬかれたケアの実践がインフラを支えてきた」(pp. 176–177)。目を引くのがジープニーのドライバーの自律性である。バウンダリーシステムがドライバーの自律性を支えているだけでなく、運行自体もドライバーの自律性に依存している。「渋滞にはまってガソリンを浪費すれば稼げない。交通の流れをうまく読む者はより多くの稼ぎを得て、うまく読めない者は少ない稼ぎしか得られない」(p. 140)。ジープニーはドライバーと乗客の交感的コミュニケーションで動いており、「交渉されあう様式」が法によって一元的に管理されていないマニラのようなところでは、自律性を生み出している (pp. 146–148)。ジープニーはまるで遊牧民にとっての家畜のように大事にケアされ、ドライバーたちは遊牧民のように国家と適当な距離を取りながら捕捉を逃れ、自律性を保ってきた。21世紀になって、世界各地で近代国家が前景化してくることは何を意味しているのだろうか。2017年のドゥテルテ政権の近代化事業はおっちゃんたちから「生の場所を共につくる」機会を奪い、ジープニーを見える形

で国家の外部へと排除した (p. 226)。だが、都市に場所をつくり続けてきたおっちゃんたちの自律性を阻んだり、ジープニーの動きを止めたりすることはできないだろう。

本書は場所の哲学への貢献も大きい。山本 [2021] は社会とは異なるパブリックな場所をつくる意義や場所をモビリティから思考する意義を説いている。場所は静的なものではなく動的なものであることをジープニーは示している。車両のケアの実践によって社会関係を引き寄せ、ガレージという場所を創り出す (p. 181)。車体のグラフィックは動く居場所であり、「取るに足らない人びと」の自己表現の場所がそこにある。場所は動的であるからこそ、「ムーブ！ムーブ！ムーブ！ピープル」をモットーに、パンデミック後のインフラポリティクスとしての「現われ」の政治を実現できたのだろう。媒介者とSNSの存在が通勤者とジープニーとの連帯を導いた。一つの公共圏が立ち現われた瞬間であった。これはヤング [2020] の見知らぬ人が共にあるという都市生活の潜在力を活かし、差異を調停しながら、複数の場所をまとめあげた広域政府の樹立を目指すという政治哲学とも重なり合う。

世界中の都市が音やにおいを失った無機質な空間に転換されるなか、「人間性の表現として都市を捉える」べきだと著者は主張する。「近代化やグローバル化がもたらす権力と資本の連携による計画や政策が、この文化、人間らしさ、歴史や想いを抹消していく現実について真剣に向き合うためだ」、「『人間の都市』は、唯一とされる人間性を解きほぐし多面化するものだ。そして、いくつもの人間性が都市をつくってきた過程と歴史を可視化する。……ジープニーは、おっちゃんたちの人間性の表現である」(p. 360)。かつて、フェルディナンド・マルコスとその夫人イメルダが、スラムに暮らす人びとを「非人間的な存在」として位置付け、彼らを排除して「人間の都市」をつくりあげようとした (p. 358)。これに対して、著者は「非人間」とカテゴライズされた、名もなき人びとが作り上げてきた都市こそが、人間性の溢れる、真の「人間の都市」であると主張する。ジープニーのおっちゃんたちは、公共交通を維持する無数の

仕掛けと場所づくりという表現によって、ある種の文化を創造してきた。彼らの実践は「正しい人間」の側にとっては受け入れ難いものばかりかもしれない。だが、ジープニーのおっちゃんたちのような人びとの人間性に希望は宿っているのだ。この視点は、「人間」が一括りで議論されがちがちな人新世の時代にあって、「人間」概念を解きほぐして、「人間」の多面化を促していく上でも意義深いといえよう。

(宮内洋平・拓殖大学国際学部)

参考文献

- 山本哲士. 2021. 『哲学する日本——非分離・述語制・場所・非自己』東京：文化科学高等研究院出版局。
- ヤング, アイリス・マリオン. 2020. 『正義と差異の政治』飯田文雄他（訳）. 東京：法政大学出版局. (原著 Young, Iris Marion. 1990. *Justice and the Politics of Difference*. Princeton: Princeton University Press.)

風間計博；丹羽典生（編）. 『記憶と歴史の人類学——東南アジア・オセアニア島嶼部における戦争・移住・他者接触の経験』風響社, 2024, 370p.

本書は主に中堅からシニアの文化人類学者が記憶と歴史の問題を論じたものである。考え抜かれた三部の構成と各章に見られる洗練された理論の扱いは、歴史家を含めた様々な研究者を唸らせるものである。まずは、本書の構成に注目しつつ、その内容全体を、簡単に紹介しておきたい。その上で、本書を読み解くための二つの問いについて考えてみる。最後に、近年のものを含めた従来の記憶論と比較し、本書の特徴を浮き彫りにする。なお、この文章では、過去に関心を持ち、過去のなんたるかの解明を自らの研究課題とする歴史学研究者ではなく、社会との関係のなかで規定され、過去に関する自らの関心を社会に発信する役割を担う歴史家という表現を用いる。歴史家の末席に連なる者として、本書について論じたい。

各章の紹介

まず序論では、編者の一人風間計博は、ピエール・ノラ等を引き、記憶と歴史が両立しないことを確認する。記憶されたものが書かれ、それが資料となり、その資料を歴史家が扱うのだとするとこの不両立は奇妙に思われるが、これは、言語論的転回後の歴史学の思潮を反映しているからである。つまり、「過去に何があったのか」ではなく、「過去がどのように記憶されるのか」を論じている。この観点から、風間は、集合的記憶とヴァナキュラーな記憶を区別している。前者は集団統合のための「首尾一貫した公的な記憶形態」(p. 15)であり、後者は「日常生活に根差した矛盾や曖昧さを含む記憶形態」(p. 15)である。

第一部は「戦争・紛争の記憶と国家」、第二部は「移動と定着の記憶」、第三部は「他者接触と記憶の媒体」である。これらの部の題目が示すように、おおむね大きな出来事から小さな出来事へと、各章が配置されている。第一部は沖縄戦に関する憑依体験（章の著者は北村毅、以下同様）、日本人の遺骨収集（深田淳太郎）、激戦地ペリリュー島のすれ違う記憶（飯高伸五）、台湾の町の抗日事件の記憶（西村一之）、インドネシア外島における9.30事件の記憶（山口裕子）、インドネシアの博物館にみるマスター・ナラティブ（金子正徳）が取り上げられている。よく知られた、構造的な差別や多大な暴力、またはそれらの一部を取り上げている。

第二部では、写真を通した沖縄女性移民の表象（森亜紀子）、フィジーにおける地方ごとの複数世代の家族の語り（丹羽典生）、同地域の島の購入とそれにまつわる不信感と不安（小林誠）、イタリアのフィリピン系移民の世界観（長坂格）が考察の対象となっている。この部は、歴史家からみると典型的な文化人類学的な成果に思える。記憶と言っても、森の論考は優れた写真論、丹羽は親族関係とエスニック集団との興味深い考察、そして小林は他のエスニック集団に関する精緻な語りの分析である。長坂の論考では、過去の出来事というよりも、移民自らや家族の足跡の意義を問うものである。この部では、過去の出来事や記憶の内実よりも、記憶を可能にする仕組みに関心があり、

このような視座は人類学的な問いと言えるからだ。

そして、第三部は、マルケサス諸島の刺青の意味論と刺青が歴史資料として残された過程について（桑原牧子）、トンガの物々交換の慣習と過去の探求における「真摯さ」（比嘉夏子）、植民地勢力との接触に関するパプアニューギニア東部山地のヴァナキュラーな記憶と夢語り（吉田匡興）、ミクロネシア連邦における家系図の作成と双系的な親族体系がもたらす西洋人男性を始祖とする「大きな家族」（河野正治）、クリスマス島の核実験についての語り（小杉世）から構成されている。この部では、過去の特定の出来事やそれまでの足跡は考慮の外側にある。記憶を可能にする仕組みも後景に退き、「何をもってして過去が想起されるのか」を考察している。いわば、過去は、「あった」「行われた」というような事実や行為ゆえに存立するのではなく、時間軸を遡る純粋な認識の対象として捉えられている。刺青さえも史料となりうるという桑原の論考は新鮮だった。出来事を論じた一見歴史学寄りの小杉の論考であっても、語りのなかに立ち現れる核実験の間接的な痕跡が考察されている。核実験の事実がどうであったか、事実と比べ核実験がどう認識されているか、というような問いが立てられているわけではない。

読解のための二つの問い

これらの15本の論考は、文化人類学と歴史学の双方の過去の捉え方を問いなおし、新たな方法の模索するものと言える。そのためにも、二つの問いをあえて立ててみたい。第一には、トラウマの問題である。ここで言うトラウマとは、「恐怖・ショック・異常経験などによる精神的な傷。それ以後の行動に、強い制限や影響を及ぼすもの」（『トラウマ』『日本国語大辞典』JapanKnowledge）であり、「ホロコーストや大震災による外傷体験は、長く心にとどまり、世代を越えて引き継がれることがある」（井上果子「外傷体験」『有斐閣 現代心理学辞典』JapanKnowledge）。本書には、トラウマをともなう記憶もそうでない記憶も含まれている。歴史家としては、ペリリュー島の記憶にみるような、現地の人々のナショナルでもローカルでもなく「よせあつめ」の記憶であるとか、インド

ネシア9.30事件に関わり、「すでに形成され流通し始めている」記憶からは「零れ落ちる無数の記憶や、『語られない記憶』（p.136）に興味がそそられる。また、山口が端的に論じるように、9.30事件の記憶についての探求は、「今後とも継続して行う必要がある」（p.136）。トラウマをともなう歴史に触れてしまうことは、その歴史を知ってしまった責任、つまり論じ続ける責任を研究者に課す。この論じ続ける責任とは逆の立場を表すのが、河野論考におけるボンベイ島民の系譜である。河野が系譜語りを聞き書きした記録は、「瞬間に、筆者の周囲にいた島民たちの話題になった」（p.314）。「余分に作成して譲ってほしい」（p.314）との打診や、金儲けの提案があったと言う。島民のヴァナキュラーな歴史において、系譜を語るとは、島民自身にとって意義深い行為であり、対面およびオンラインのコミュニケーションを促進する。現地社会がこれほどまでに語り続けたい状況では、知ってしまったがゆえに論じ続けるという研究者の責任は、生じていないようである。

第二には、分かりやすさについてである。戦争の記憶は、聞く側にも辛く、追悼という行為に「周波数を合わせる」（p.71）という適切な態度を取る必要がある（深田論考）。「周波数を合わせる」とは、深田が論じるように、宗教的儀礼の場合もあれば、ナショナリズムに回収される場合もある。トラウマをともなう歴史を知る、またはそのような記憶について関わるということは、宗教やナショナリズムを通した死者との同調という分かりやすさを創り出す。また、金子の描写するインドネシアの博物館では、ジオラマを使うことにより、歴代政権が求める分かりやすい歴史理解へと来場者をいざなう。西村は、このような分かりやすさへの転換を、「記憶の経済化」とする論考を参照し、記憶が語られるときと書かれるときの差、つまり口語から文語への移行に見い出している。彼の論考が対象とする「マララウ事件」は、町史に書かれ、その後、記念碑が建てられた。以前はほとんど記憶されていなかった事件が、分かりやすい記念碑の叙述となり、日本人による弾圧事件として住民共通の記憶となっていく。分かりやすく改変されていく記憶とその記憶を学術的洗練さを

もって論じる本書が対比されるのだが、この対比をどう理解したら良いのだろうか。

近年の記憶論から

最近の新書に、梯久美子『戦争ミュージアム——記憶の回路をつなぐ』（岩波新書、2024）がある。14カ所のアジア太平洋戦争関連の展示施設を論じたものであるが、分かりやすい平和への志向という全体テーマの下に整理されている。また、記憶論として名高いビエール・ノラの『記憶の場——フランス国民意識の文化＝社会史』（岩波書店、2003）にしても、そこに掲載された論考の多くはエッセーとも言えるほどに読みやすい。その反面、本書は、洗練された理論を使い、平均的な日本語読者には縁遠い他社会における記憶を扱っており、読者に大きな負担を強い、高い学識を求めるものである。それぞれの本には、それぞれの良さがあり、なんらかの基準を課すつもりはないが、記憶を論じるにあたり、分かりやすさか、学術的洗練か、どちらを優先すべきかは判断の余地があろう。

また、近年話題となった記憶論に、林志弦の『犠牲者意識ナショナリズム——国境を超える「記憶」の戦争』（東洋経済新報社、2022）がある。林は記憶の政治化の一般的な傾向を論じている。日韓の間のアジア太平洋戦争をめぐる記憶の政治に食傷感のある日本の読者には、その政治の不毛さを訴えるものとして読むことができ、特に韓国人による提起だったことが重要だった。ただ、林の著書を読んだ後、評者には納得できない感覚が残った。本書を読み解くことにより、その感覚の所在が明確になった。林の論考では、記憶が政治化することが前提となっている。これに対して、本書は政治化する前の記憶の生成や作用を論じている。記憶に対する姿勢としては、本書がより優れているように思える。多くの記憶は政治化しないし、個人や共同体が記憶に対して向き合うことは、そのものとして好ましい人間的なことなみである。このような記憶の多様性を暗黙のうちに礼賛している本書を歓迎したい。

文化人類学者の保守と革新

ただ、歴史家から見ると、文化人類学者の記憶との向き合い方について知りたいことがある。保守的な歴史家であれば、安定的な歴史認識を支える記憶の秩序を守りたいと思うだろう。いわば、記憶の秩序の守護者としての役割を果たそうとする。他方、革新的な歴史家であれば、様々な動機で記憶の秩序を揺るがそうとする。いわば、集合的記憶を揺さぶる者、つまり共同体の公的記憶の攪乱者として学究する。図式的な言い方をすれば、記憶の秩序を守るためにも、または揺るがすためにも、実証という手続きによって叙述や発信を行うことになる。この保守と革新という立場が、文化人類学者の場合、どうなのかという問題である。

テッサ・モーリス・スズキが提唱した「真摯さ」が数多く典拠され、本書を貫く共通概念の一つとなっているが、彼女の論考では、「真摯さ」は歴史家を含め全ての人がどのように過去に向き合うべきかを問う概念だった（『過去は死なない——メディア・記憶・歴史』岩波書店、2004）。本書では、「真摯さ」はむしろ共同体の記憶に文化人類学者が誠実に向き合うことを意味しているようである。この文脈で取り上げられるのが、若くして亡くなってしまい、その後オーラルヒストリーの旗手として論じられてきた保刈実である。保刈の調査対象のアボリジニの共同体において、ジェームス・クックが訪れた、という史実はない。しかし、保刈は史実として認められない語りも含めて、彼らの記憶を歴史実践として尊重すべきだ、と論じたことが思い起こされる（『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房、2004）。では、この共同体の記憶が揺るがされることはありうるのか。または、そのような記憶の攪乱が好ましいと思われる状況は生じうるのだろうか。保刈のような記憶の捉え方は、著しく静態的であり、保守的な立場に思える。保刈が保守だとすると、革新的または「ラディカル」な文化人類学者には、どのような学究と実践が求められるのだろうか。

（岡田泰平・東京大学大学院総合文化研究科）

岩元真明, 『ヴァン・モリヴァン——激動
のカンボジアを生きた建築家』 millegraph,
2025, 333p.

ヴァン・モリヴァンという名前は、近年とみに建築の分野で耳にする存在になってきた。本書の著者・岩元真明は、その流れをつくった人である。著者はホーチミン市の建築設計事務所で勤務した経験があり、東南アジアの都市・建築に興味を持った。ただ、そこで最も惹かれたのは、隣国カンボジアのモダニストであった。それくらい、モリヴァンの建築は突き抜けていたのである。このような、建築設計を主としてきた著者により、この書は上梓された。

モリヴァン自身はカンボジアの建築界、またカンボジア近現代史ですでに名の通った存在であったので、彼の作品・経歴を扱った書はこれまでいくつか出されていた。著者は、それら先行する研究を、文字通り隈なく目を通し、また関係者の元を渉猟して、この書をまとめ上げた。評者自身も彼のその活動を目にしたことがあるが、カンボジア人、フランス人問わず、どんどん相手の懐に飛び込んでいく行動力に、深く感じ入ったことがある。そうして出来上がった本書は、まさにモリヴァンに関する研究の決定版といっていい内容である。彼の個人的バックグラウンドから建築作品の詳細な読み解きまで、先行研究を踏まえた分析には刮目される思いがする。まさに、副題にあるように「激動のカンボジアを生きた建築家」の生涯が、その根差した国家の歩みとともに、迫真の勢いで伝わってくる。

本書は、植民地時代の保護国カンボジアの建築の状況から書き起こされる。フランスによる現地人利用の流れの中でも、仏領インドシナではベトナム人の登用が進んだ一方でカンボジア人にはそのような場は与えられず、フランス人・ベトナム人による二重の支配を受けた状況下であった。これは、独立後に世に出たモリヴァンにとっては、まさに身一つで舟を漕ぎ出す必要があったことを意味する。やがてパリに留学した彼は、カンボジア留学生のネットワークを構築するなど、早速その個性を発揮する。勉学の方も大きく成果を实ら

せて、歴史あるエコール・デ・ボザール（国立美術学校）を首席で卒業。帰国後の彼は、紆余曲折を経ながらも多くの国家的建築の設計を手掛けていくのである。本書では、これらの建築作品について、建設の背景や設計が詳細に分析されていく。

彼の初期の作品では、カンボジア住宅の屋根やアンコールの塔など伝統建築からの直接的なモチーフの引用が目立つ。これは抽象的デザインを標榜するモダニズムとしては教義に外れたことになるのだが、著者はこれをモリヴァンの創作における発展段階説を想定して説明する。つまり、彼のキャリアを大きく三つに分けて、折衷的デザイン、原理的・構成的な伝統解釈、気候適応と地場材料の活用、という「創作の三段階」を経ると述べる。実際、第二段階の作品にあたる国立劇場では、前段階では具象的だったクメール式塔が、四角錐の幾何学的造形へと変化している。そうして、代表作ナショナル・スポーツ・コンプレクスが出来上がる。古代クメール文明の復興を標榜してアンコール・ワットが参照されているが、もはや具体的・直接的なモチーフの引用は見られず、抽象的な構成原理を取り入れたデザインとなっている。それは、正方形平面と中心軸であり、これは今日のアンコール・ワットの建築史学上の理解と共通した見方である。すなわち、それまで別個に発達してきた、正方形を重ねていく階段状ピラミッド型の集中型プランと基軸線上に建物を配置する軸線型プランが、ひとつに融合したのがアンコール・ワットであった。古代建築に対するモリヴァンの優れた理解が存分に発揮されたといえよう。著者の分析によれば、この入れ子構造と軸線配置はモリヴァンの他の作品にも見られ、彼の設計の決まり手でもあった。その両者を融合したという点では、この作品はモリヴァン個人にとっても畢生のモニュメントであったといえよう。

ところが、これ以降、彼は国家的建築からは撤退し、個人事務所での活動が主となる。その背景について、著者はシハヌークとモリヴァンの目指すところの違いを示している。シハヌークは国家の繁栄を映した都市美の演出に執着し、モリヴァンは舞台装置をつくることに腐心してきた。しかし、その間にもプノンペンでは貧困層の拡大

が深刻化していた。彼は与えられた役割の中でその対応を図り、住宅の増産や後進の育成に取り組んだ。作品のカテゴリーが変わったことは、当然ながら建築デザインにも影響した。先の著者による分析では第三段階となるが、気候対応と地場材料の活用という点でローカルな風土に正面から取り組んだ。建築設計上の三段階は、本書では、建築家を取り巻く人脈の変化にも対応させており、単なる作品解説を超えた、モリヴァンの仕事の背景や人物像にも踏み込んだ深い分析へとつながったといえよう。

モリヴァンは建築設計以外にも、教育や政治・行政、またアンコール遺跡群の保存の仕組みづくりにと奔走した。いったい一人の人間が、これだけの仕事をこなすことがどうして可能だったのか。本書はその人物像を生き生きと描き出すことに成功したといえよう。それは、副題にあるように、「激動のカンボジアを生きた建築家」というイメージであった。ただ、このイメージを創出する陰で、捨象されたものもあったのではないか。

本書であまり紹介されていないモリヴァンの仕事として、都市計画がある。都市計画の仕事は、本書のところどころでも出てきてはいるが、彼が都市計画に込めた思いはもっと強調されてもよかったのではないか。首都プノンペンはもとより、シハヌーク・ヴィルのマスタープランも彼の手によるものである。特に後者は、国家元首の名を冠した全くの新都市であり、都市を一から創り上げるといふ、建築家としてはまたない仕事であったはずだ。60年代のモダニストにとっては、建築と都市とは連続した存在であり、都市計画こそ究極の目標であった。また、遺跡保存としてのアンコール公園・シュムリアップ計画もこの範疇に含めることができよう。これは、カンボジアの都市の現在・過去・未来の、それぞれを代表する都市を彼が総攬したことを意味する。モリヴァンとシハヌークが都市の創造者なら、クメール・ルージュは都市の否定を実行した。この2つの対比で描き出せるカンボジアの現代史もあり得るかもしれない。

都市への視線は、モリヴァンのもうひとつの大

きな仕事である研究・出版にもつながっていく。本書でも紹介されている *Modern Khmer Cities* (近代クメールの都市) に加え、*Les cités khmères anciennes* (古代クメールの都市) も著しており、都市史・都市計画についての彼の見識と知識をうかがい知ることができる。彼は、最晩年まで、プノンペンの都市計画について思索を巡らせていたという。やはりそこには、都市スケールだからこそ立ち上がる、彼ならではのイメージがあったのではないか。

さて、著者があくまで追い求めていたモリヴァンの姿は、やはり建築家としての彼であった。建築家が誕生するためには、まずはその価値が、(個人にも社会にも) 理解されていなければならない。本書は、この原則に忠実に物語を描き出した。ただ、その余りに、建築家を一個の完結体として主体的に描きすぎてはいないだろうか。彼の作品は、すべてが彼の意志だけでできているわけではない。独立記念塔において、アンコール遺跡のひとつ、ヒンドゥ寺院のバンテアイ・スレイをモデルとすることは、シハヌークの指示であった。都市計画上の配置計画も、同じくシハヌークの決定であったという。シハヌークは、デザインについては自由な立場だったというが、彼もまたひとりのアーティストであった。実際のところは、王の関与は様々な点で大きかったのではないか。そもそも、なぜここでバンテアイ・スレイだったのか。この寺院は王室寺院ではない。また、その有名な赤砂岩の色も、独立記念塔は当初はグレーだったことを考えると、理由として挙げることはできない。なぜ、アンコール・ワットではなかったのか。

他に、グレー・ビルディングのスカイラインは、ニューヨークの摩天楼がインスピレーションの源になったと、モリヴァン自身が告白している。建築家のデザインソースは、それこそ自由なものである。やはり、本書の記述は、あまりに建築家にクメール民族を背負わせすぎたのではないだろうか。

創造する主体としての建築家モリヴァンは、どのように建築を捉えていたか。著者はひとつの図式を用いて説明している。そこでは、伝統建築の近代化と近代建築のクメール化が対比的に示されているが、併せてインド建築のクメール化、西洋古典建築の近代化も組み込まれている。ただし、

本文ではインド建築（インド文明ではなく）のクメール化については何らの説明がない。かつて蘭領東インドの建築家は、ジャワの古代建築をインドから伝播したものとして切り捨てたが、モリヴァンは、造形のクメール化をどのように考えていたのだろうか。かたや、西洋古典の近代化についても、彼はどのようにみていたのか、もっと突っ込んだ分析が欲しかった。これは、創作の三段階で示されているような、時系列上の彼のデザインの変化と直結する問題である。彼のデザインが折衷から抽象へと進んだのなら、では彼はモダニズムの出現をどう捉えていたのか。彼の学んだ頃のエコール・デ・ボザールは、まだまだ歴史主義の残り香が強かった可能性が高い。彼のコルビュジェ理解も、当初は皮層的に留まっていたかもしれない。もっとも、ピュアなモダニズムなど、それこそユートピア的なもので、現実にはどこにもありはしない。モリヴァンは、それを体現した人であったといえるだろう。

著者の創出したモリヴァンのイメージは、具体的に豊かなものであった。そのストーリーテリングは、よくデザインされているだけに、別の角度からみたとき、彼の業績はどう評価されるか、その点も気になる。本書でも、比較事例を度々挙げて、その位置付けを示しているが、スリランカやベネズエラの事例は、同時代性を裏書きしてはくれるが、モリヴァンの相対化までは届いていないだろう。南ベトナムのゴー・ヴィエト・トゥやタイのスメート・ジウムサイといった建築家たちとは、モリヴァンは何が違ったのだろうか。そうして、対象の相対化のためには、史料批判がもっと必要である。本人の言に隠された真実を暴く作業は、もっと丁寧に行うべきである。

本書を読んでいると、著者自身がモリヴァンに心酔している様がよく伝わってくる。が、それは、単なる対象への愛に留まらず、対象への自己投影が込められてはいないか、というのは評者の穿った見方だろうか。著者もまた、建築設計と研究を手掛ける多才な人である。対象を描き出すためによくプランニングされている、という意味において、本書は、やはり建築家を書いた本だとは思ふ。そうして、本書は、だからこそ、読者を惹きつけ

るストーリーを持ちえたといえよう。読者は、著者のデザインしたプランに従って歩を進めればよいのだから。今後、著者はどのように自らの行路をデザインしていくのだろうか。著者のさらなる活躍に期待したい。

（大田省一・京都工芸繊維大学デザイン・建築学系）

中辻 享、『焼畑を活かす 土地利用の地理学——ラオス山村の70年』京都大学学術出版会、2025、vi+408p.

焼畑は東南アジアの各国政府によってこれまで森林減少の元凶のひとつであるとされてきた一方で、研究者のコミュニティにおいて焼畑は森林環境に適した農業形態であるという評価がある。本書は、こうした意識の違いの背景に焼畑の定義の違いや焼畑の評価に乖離があるためだとし、こうした乖離がどのように生じているのかを明らかにしようとしている。非常に厚みのあるデータから着実な議論が展開されており、全般にわたって説得力のある内容となっている。ここではまず本書の内容の説明から始めたい。

本書で用いられた方法論は2つに分かれており、これに対応した構成になっている。一つ目は2000年代以降の焼畑民の土地利用を同時代の現地調査から明らかにしようとするものであり、第1部「国家政策の影響とラオス焼畑民の対応」（第3章～第6章）と第2部「焼畑民による家畜飼養」（第7章～第9章）がこれにあたる。もう一つは過去から現在までの焼畑民の土地利用の変遷とそれが森林に与えた影響を1945年以降に撮影された航空写真を用いて明らかにしようとするもので、第3部「長期的な土地利用・土地被覆の変化」（第10章、第11章）がこれにあたる。なお、第12章は本書全体をまとめる総合的な記述となっている。

第1章の序論では、本研究の対象である焼畑が、近年減退しているということについての問題性を扱っている。まず焼畑減退の事実と、それを引き起こす主な要因として森林保護政策、大規模農業開発を進める政策、市場向け活動の展開があげられる。焼畑の減退によっておこる問題として、焼

畑によって提供されてきた安定した生計の喪失、集約的な栽培への転換による植生や土壌の劣化、炭素蓄積量の減少といった環境の悪化があると指摘する。また著者は、焼畑減退の主要因を焼畑抑制政策と市場経済の浸透であるとしており、特に影響のあったものとして1990年代以降の森林保護政策、移住政策、そして市場経済化を促す3つの政策をあげている。本書の目的は「村落レベルの70年間の土地利用・土地被覆の実態分析に基づき、焼畑民がどのように生計を営み、土地利用を实践してきたか、それは森林にどう影響してきたかを明らかにすること」(p. 48)である。これを明らかにするための下位の問題設定として、微環境に基づく土地利用の違い、国家政策への人々の対応、生計と土地利用の世帯差、焼畑と他の生計活動との土地利用上の関わり、家畜飼養の実態解明、村落間の差異、焼畑・焼畑民が森林に与えた影響、現代史の政治的変動の影響があげられており、この後の章で具体的に論じられる。第2章には本書の主な対象地域であるラオス北部ルアンパバーン県シェンヌン郡カン川周辺地域およびルアンパバーン県ウィエンカム郡サムトン村の概況の説明が入る。

続く第3章～第6章は第1部「国家政策の影響とラオス焼畑民の対応」として議論が展開する。第3章では、土地森林分配事業と換金作物栽培が住民の生計と土地利用に与えた影響について論じられる。対象村落では1990年代に商品作物としてハトムギとカジノキが導入されたが焼畑を完全には代替しておらず両者の共存がみられる。この理由としてこれらと陸稲の間で土地利用と労働力の面で競合が少ないことが指摘されている。一方でその栽培規模や参入の程度は貧富の差が影響しており、貧困世帯ほど焼畑依存度が高くなっているため、焼畑として利用可能な土地を制限する土地森林分配事業は貧困の差を拡大し、集約的な焼畑を余儀なくするものであるとして批判が行われる。第4章では、焼畑や換金作物の農業経営規模、コメ収支の分析等から、世帯の差が生じる要因について考察が行われる。対象村落では市場経済の浸透が進んでおり貧富の差が生まれているが、そこには民族間の経済格差が関係していることが指摘

される。幹線道路沿いの低地では、市場経済の浸透が顕著であり、人口圧の増大により焼畑の継続が困難であるのに対し、高地の領域では焼畑が継続されやすくなっている。また収穫物の貸借や先物売が村内の経済格差を拡大する大きな要因になっていることが指摘される。さらに本章では貧困世帯の中には焼畑を営むことができずコメの借り入れ分が生計に重くのしかかる世帯が多くあり、焼畑が有してきたセーフティネットとしての機能が失われている事実が指摘される。第5章では、ラオスの農村開発政策が焼畑民の生計と土地利用にどう影響したかについて、高地村落と低地村落の土地利用の比較から論じられる。高地村落では安定的な焼畑によりコメを確保したうえで、家畜飼養等の市場向けの仕事にも従事し生計が安定している一方で、低地村落では焼畑が困難なためコメの確保が難しく、現金収入につながる活動が芳しくないため、低地への移住世帯は貧困化していることが明らかとなった。一方住民は低地と高地の両方を利用ししのいでいた。著者はこの事実を基に、例えば低地と高地のアクセス改善や村の境界問題への対応等によって住民の生計戦略を支援する開発政策を打つべきであると主張する。第6章では、対象を14カ村に広げ、各村の焼畑の重要性の差異とその要因を村域と人口移動の面から考察している。土地森林分配事業による村域の画定は効力を持ち、村境の争いは無くなった一方で、村内の土地利用については慣習的な制度がいまだ影響力を持つ。これまでは低地への人口の集中が焼畑の実施を困難にしているという大雑把な議論があったが、本研究により、村境をまたがない移動よりも、またぐ移動が土地への実質的な人口圧につながるということが明らかになった。ここから著者は、人口集中の問題は村境とセットで考える必要があると指摘している。

第2部(第7章～第9章)では、焼畑村落における家畜飼養の意義について論じられる。第7章では、家畜飼養のための出作り集落「サナム」に特に着目し、そこでの家畜飼養の実態の報告、類型化、そして問題点について整理が行われる。家畜は食糧としてのみならず祭祀や行事にも利用される重要な資源であり集落周辺で家畜は飼育され

てきたが、1990年代以降から伝染病を回避しつつも、放し飼いのこだわり、世話の労力、餌となるトウモロコシ畑との距離等の関係性からサナムの設置が広がった。これ以外にもウシやスイギュウの管理のしやすさ、狩猟の前線基地としての役割もあり村では広く受け入れられた。一方サナムの設営には困難もあり、管理に多くの労働力が必要となること、ある程度の初期投資が必要なこと、他に人がおらず寂しいということ等も重要な要素となり、設置世帯は限られた。サナムには石灰岩地帯、高地帯、低地帯のものがあ、石灰岩地帯のサナムが家畜飼養には理想的である一方、現実はその他の生計活動とのバランスや前述の障壁によって現在は舎飼いの移行が進んでいると指摘する。第8章では、よりサナムに焦点が当てられる。家畜飼養は生計の中で焼畑に従属するというよりも、焼畑と同程度の価値を有し、サナムは焼畑と家畜飼養の両方を実施するための拠点として機能していることが強調されている。第9章ではウシとスイギュウの飼養実態が報告される。高地は、利用可能な土地が残っていることと餌となる雑草があることから重要である。飼養拠点としてはサナム、放牧小屋、塩やり場があり、柵作りにも多大な労力を要するため、村の土地利用は放牧を前提としたものになっている。若い焼畑休耕地を家畜飼養の場として利用する村落もある一方で、焼畑耕作期間での放牧は土地利用権が重要因子となることも指摘される。一方、歴史的には焼畑と結合してきた家畜飼養も、参入障壁の高さ、労力、飼料の確保、伝染病、畑地の被害等の問題から、現在は負担やリスクが高くなっている。

第3部（第10章～第12章）では、長期的な土地利用と土地被覆の変化について、前章までの知見も交えながら論じられる。第10章では、第二次インドシナ戦争の間の、山地村落への人口の移入、特にモン族の移入が、高地での焼畑によるケシとトウモロコシ栽培を促進し、さらにチガヤ草地の維持で森林の劣化が急速に進み、現在に至るまで植生が回復していないことが明らかにされる。他方第11章では、前章とは対照的に隣接地域における戦争中の山村からの人口流出が森林被覆の増加をもたらしたことを明らかにした。戦後には山村

の人口は回復し焼畑は再度行われ土地利用圧は増加したが、住民による森林の積極的維持も行われ、積極的な焼畑の実施が必ずしも森林減少と結びつくわけではないと指摘する。また、10章と11章から戦争による森林への影響の大きさが浮かび上がり、現在の森林の状態の理解には戦争の影響をよく考慮する必要があると指摘している。第12章では本書の総括が行われる。ここでは7つの点が提示されているが、焼畑農村の住民の活動を制限する政策への批判と、住民の生計戦略の支援に向けた提言が述べられ、特に、住民による有効的な土地利用や家畜飼養への支援や焼畑農村におけるセーフティネットの再考が強調される。また今後の研究をより進めるためには、第二次インドシナ戦争の影響の大きさの再評価、広域における航空写真、衛星画像利用の必要性も課題としてあげられている。

本書では、ラオス北部の焼畑の実態が豊富なデータを基に描かれ、議論が緻密に組み立てられている。本書の論理展開は信頼性が高く、今後の研究の足場になり続ける良書である。まずは、こうした豊富なデータをまとめあげ労作を出版された著者に感謝を申し上げたい。本書において明らかになったことは多いが、章構成に表れているように、焼畑における家畜飼養の実態や、約70年間の長期的な視点から、土地利用・土地被覆の変化を高い精度で明らかにしたことの2点は、特に高い新規性を持つと思われる。またこの2点は、それまでの第1部にある、生計と土地利用に関する詳細なデータとそれに基づく着実なロジックが基盤となっている。また全体を通して、綿密な聞き取り調査と地図の併用により、村域の全体にわたった生計活動の正確な把握が際立つ。アクセスが悪いために把握されてこなかった焼畑村落に特徴的な活動が本書で明らかとなっており、第1部では高地と低地の土地利用の差異の分析から、焼畑を行う住民の柔軟な対応が明らかとなった。第2部では焦点が家畜飼養に移り、これまでほとんど把握されてこなかった実態の解明と類型化に成功した。第3部では長い時間的スケールをとることによって、第二次インドシナ戦争の森林への影響をはっきりと描き出している。この成果は、こ

れまで漠然と行われてきた、森林劣化や減少の議論にくさびを打ち込むものであり、大変興味深い。著者はこれらの結果を元に政策提言も行っており、傾聴に値する。この成果がラオスの人々に届くことを願っている。

本書によって明らかになった様々な成果がある一方で、評者としてはいくつか気になった点もあるので記しておきたい。まず、本研究によって得られた知見の一般性の問題である。本書はルアンパバーン県の村落を対象とした事例を扱っており、例えば高地は「冷たい土地」であり焼畑に適しているという記述がしばしばみられるが、評者の経験では、こうした評価は村によって異なるように思われる。尾根沿いの土地を「熱い土地」、谷沿いの土地を「冷たい土地」とする村があったり、生育する植物によってそれが決まったりする場合もあり、土地への評価は必ずしも一定ではない。またラオス北部一つをとっても、石灰岩地帯を含む土地利用や、自給用および商品用の作物栽培、家畜飼養、水田との関係性は様々である。シェンクアン県やフアパン県ではルアンパバーン県よりも高標高な土地、異なった環境条件でも焼畑は行われている。家畜飼養の比重もルアンパバーン県のものよりも比較にならないほど高い村落も多い。評者としては、もう少し広い範囲における焼畑を基盤とした生計について、著者のビジョンや評価を教えていただきたいかった。

また評者としては、本書が森林のことを扱いながらも、森林植生や環境の情報がやや少なかつたのも気になる点である。本書は基本的には聞き取り調査情報と地図情報の相互参照を行うことによって議論を展開するが、住民の土地の選択や評価には、聞き取り調査によって得られる情報だけではない、潜在的な経験知のようなものも含まれるはずである。こうしたもののより深い理解には、そこにある環境のより多面的な理解が必要ないように思われる。

最後はやはり、本書によって得られた知見を基にした、焼畑研究の今後の展開がやや見えにくいことを指摘したい。本書では確かに厚みのあるデータによって強固なロジックが構築されている。しかし一方で、そこから導き出された、焼畑村落

の土地利用に関する知見や焼畑を内包した社会がどのようなべきかに対する今後のビジョンが個別的なものにとどまっている感があるように思う。焼畑は人類史の中でも歴史の古い農業で、世界中で行われてきた農業である。研究にしても膨大な蓄積がある。評者としては、著者の考える焼畑研究のより大きな地理的、時間的スケールで考えた場合のビジョンがどのようなものであるのか、知りたかった。これについては本書の中でも時々触れられていたの、今後の展開に期待したい。とはいえ、本書は今後の研究を進めていくうえでの着実な足場を提供している良書であることは間違いない。ラオスで行っている評者としても、ラオス研究者の後輩として着実な成果を拝見し、身の引きしまる思いである。貴重な成果を出版していただき大変ありがとうございました。

(広田 勲・岐阜大学応用生物科学部)

師田史子、『日々賭けをする人々——フィリピン闘鶏と数字くじの意味世界』慶應義塾大学出版会、2025、vii+354+20p.

本書は著者が2022年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した博士論文に基づく著書である。実証に裏付けられた手堅さと現場に密着した生き生きとした描写によって、優れた研究成果でありつつ、読みやすく飽きさせない書物となっている。

序章「彩色の精神」において著者はまず、賭博の賭けや遊びに「定型的で無味乾燥な毎日を鮮やかに彩る」「近代合理的な価値から自己を解放する」「彩色の精神」を抽出したいという(p.7)。著者は特定の社会における賭博の捉え方、実践のされ方に着目する。また賭博を社会的機能として捉えるのではなく、賭博者の体験に注目し、劇的な勝負よりも賭け続ける日常を描くことを中心に据える。

本論は、賭博実践の社会背景を描く第Ⅰ部、フィリピンを代表する伝統的な賭博である闘鶏の実践と賭博者の言説を描く第Ⅱ部、フィリピンにおいて日々広範に行われている数字くじの生活におけ

る実態と没頭する人々の言説世界を描く第Ⅲ部で構成されている。

第Ⅰ部「賭博が根差す場、その基層」は4つの章から成る。第1章「賭博との出会い、フィールドワークの輪郭」は、フィリピン国家の最周縁に位置する地域社会としてのミンダナオの4つの調査地と調査対象となる家族たちを紹介する。また依拠する現地調査のデータの性質を示し、特に著者自身人々と共に賭博の実践を行いつつ暮らしの中で調査を進めた点を示す。

第2章「フィリピン賭博の歴史」は、植民地期以前から行われていた賭博が、16世紀のスペインによる植民地支配以降、度重なる国家の介入を受けつつ生き延びてきた様を描く。賭博は常に規制管理の対象であったが、大衆の支持は揺るがず、その緊張関係の中で闘鶏は国家に包摂され、数字くじは非合法のまま国家を翻弄しつつ繁栄し、やがてドゥテルテ政権によって合法化に向かった。

第3章「規律訓練されない賭博者たち」は、道徳規律をフィリピンに確立するとの名分で政府が既存の数字くじを合法賭博に包摂したことに対し、人々が暮らしの中でどう語り行動したかを描く。合法賭博に従う人が多い中政府の規制から外れた違法賭博を運営する者もあり、社会規範を無視した政府の取り締まりに対し義憤を表にする姿も見られ、人々の暮らしの中での賭博についての意識や規範は実質的に変わらなかったという。

第4章「善悪と神」では、人々の賭博をめぐる道徳観念、社会規範、宗教的世界観がいかに醸成されていくのかを分析している。賭博への過度な没入を危険と考え、「遊び」として「ほどほど」にすることが良しとされている。また賭博の勝ちはずいぶん幸運なあぶく銭であり、勝ち金の分配を惜しまずすべきと考えられている。最後に賭博における神がどう捉えられているかが考察される。賭博の勝利という幸運を神や宗教的世界観と関わらせる考えはあるが、むしろ賭博者は、偶然の連なりの中に見られる超自然といえる何かの発露として幸運を捉え、それを繰り返し希求している。

第Ⅱ部「闘鶏——人間と鶏が織りなす伝統的熱狂の円環とリズム」は2つの章から成る。第5章「闘鶏のエコノミー——鶏と関係を結び、鶏に生活

を賭ける人々」は高度に近代資本主義的な闘鶏の経済構造のもと、愛着と距離間の二律背反の中で鶏を繰り返し育て闘わせ続ける闘鶏家たちの姿を描き出す。闘鶏は公認の全国的なスポーツ兼賭博であり、鶏の育成を含むすそ野の広い一大産業である。闘鶏産業の管理方法、会場、試合の組まれ方と実施の流れ、二種類の賭け、試合の進め方と経過、決着と鶏や掛け金の処理、また闘鶏のための鶏の品種、3人の闘鶏の鶏の育成者の姿、そして闘鶏の鶏の育成、健康管理とトレーニング、試合の中で鶏が置かれる状況と闘鶏家が見守る距離感、そして最後に死んだ鶏が勝者の食用とされる結末までの流れが詳細に描かれる。

第6章「充滿する『負けの理由』——鶏に賭ける技法と不運の制御」は、知識と技術を駆使しつつ繰り返し運を引き寄せそうとすることで、賭けに勝ち利益を得ようとする賭博者たちの姿を描いている。鶏のケアについての実際の知識や月の満ち欠けと鳥の色の賭け合わせで占う民族知的な理解を交えつつ賭ける鶏を決める。連続する試合に人々は賭け続け、勝敗をめぐる賭けの反復のリズムが生み出される。人々が勝因や敗因について語り合う中、連敗における敗因めぐり不運についての議論が特に前景化する。それは、勝つか負けるかの二者択一なら負けの次は勝ちそうなのに連敗が続く不可解さや、どんなに知識を尽くしたところで実際の鶏の闘いの勝敗は生き物ならではの予測不可能性に翻弄されることによる。賭博者たちは、運の時間的、空間的な流れをつかもうと工夫を凝らす。

第Ⅲ部「数字くじ——無根拠性の内に増殖する自己と世界の接続」も2つの章から成る。第7章「つまらない賭博への没頭——数字で世界を埋め尽くす」は、ランダムな数字にただ賭けるだけの「つまらない賭博」である数字くじに、なぜ多くの人々が熱中するのかを問い、賭博が日常を侵食し、日常が賭けと連続するかのようになんか魅了する、と捉える。「ラストトゥー」くじは単価が安く、抽選は毎日3回、主に二けたの数字を当てれば80倍の配当がある。売人は積極的に人々を訪問し、常連客の生活リズムにくじが習慣化される。勝率が半々の闘鶏で不運が前景化するのと対照的に、確

率がより低いラストトゥーでは当たった幸運が前景化しやすく、しかも当選情報が広まり、当選祝いが仲間たちと共有されることで身近に認識される。生活の中で人々は自分に関わる数字を意識し積極的に探すことで、生活の様々な局面の意味が再確認され、それが賭ける数字と運命的に関連している可能性を想起させる。ありとあらゆるものが数字によって自己と結びつけられ、そこから幸運を探索するゲームが、他者と議論や情報を広く共有しながら実践される面白さがある。本来無根拠な数字くじの結果を恣意的に自己と接続することで、偶然と戯れる遊戯を生み、そこでの当選は社会性や必然性と切り離された「純粋な幸運」となる。こうして単純で浅い遊びや賭けであっても、賭けを楽しもうとする賭博者の能動的な態度によって深い意味世界が創造される。

第8章「確率的思考の流転と現実性への接近——異なるレイヤーを往還する」は、数字くじに参加し続ける人々の、賭け実践の中での確率的思考の変容を捉えようとする。ラストトゥーの賭博者は、数字との出会いを予兆として捉えつつ100分の1の中で判断し、賭けた数字が「出るか」「出ないか」の二者択一つまり2分の1で待ち、結果が判明すれば絶対的な現実としての1に至る。その過程が反復され、自分とその世界、また他者の数字の世界と出会い続ける。

終章「意味に満ち満ちた世界」は、以上の論点を、賭博者の世界、賭博者の生、という点から論じ、まとめている。

いくつかの点について論評したい。まず第4章における「賭博における神」について、キリスト教研究を専門とする評者の観点からコメントする。キリスト教は聖書や伝統における物語を提供し、信徒は自身の人生をこれと重ね合わせることで、神の存在と導きを実感して生きる。それは、細田[2019]が指摘したような「人生を賭する物語」において神からの幸いを見出すという姿との親和性が高い。他方でそこには賭博者の人生と重ね合わせる物語は見られない。著者が明らかにしている通り、賭博者にとってキリスト教とは異なり、神なき純粋な偶然が繰り返される世界を前提とし

ているからだろう。そうであれば、日々賭博者のな生を生きる人々の多くがキリスト教徒であることを、どう捉えたらいいのか。この問いはすでに、人々が教会に所属しつつ、教会が認可・黙認するところを侵犯しながら生きている現実を描くリンチの「フォーク・カトリシズム論」[Lynch 2004]や、人々がキリスト教徒である自身とその規範と無縁な実践を切り分けて二重生活を生きているとするプラタオの「二段重ねのキリスト教」[Bulatao 1965]以来現在にまで続く、フィリピンを宗教文化理解に関する基本的な論点である。本書はここに新たな光を当てていると言える。

他方、評者にとって引掛かりを覚えたのは数字くじをめぐる賭博者の描き方である。特に8章では数字くじの考察が、勝ちを目指す個人の思考の展開をめぐる哲学的な考察で占められている。著者の中心的な関心が「賭博者のな生」を描き出すことに向けられているからであろう。しかしほかの点ももっと掘り下げるべきと評者には思われる。

本書の記述によれば、数字くじは全国規模で日に3回実施されており、これを運営組織のヒエラルキーが、巨額の資金によって運営している。この組織に支えられ、末端においても売り子が、これまた全国展開している闘鶏場も絡めつつ、精神的なセールスを行っている。賭博者の環境は、この巨大な制度、産業によってお膳立てされている。総じて賭博者が損をし業界が巨万の富を蓄積するこの仕組みに、数字くじに熱中する人々はハマられており、日々数字が頭から離れない中毒の中にある。生活の破綻を避けようとする規範については第4章に記されてはいるが、もっと構造的な問題がある。賭博者の生が持つ「幸福」は、没頭する楽しみの詳細を描き出すだけではなく、この中毒的な側面や搾取的な側面と合わせて考察する必要があるのではないかな。

また、この賭けのゲームは、生活世界の中で賭博者ひとりひとりが、繰り返し数字を探し賭けに打って出ることとしていて、ひとりひとりの幸運の探求として描き出している。しかしこのゲームは、濃密な社会関係とそこで共有されるゲームのルール、また繰り返される議論とそこでお互いに数字を想起しあう場、また勝てば賞金を分かち

合ったりもする関係性を不可欠の舞台としている。確かに各自は最終的に自分の判断で自分のお金を賭けるだろう。しかしこの賭博は、個人の生活のみならず、社会関係が数字で埋め尽くされるような環境でこそ、より重厚な数字世界を生み出し、反復されるより長期の継続的ゲームとして捉えられる。だから、賭博者は単独のプレーヤーでもありつつ、そこには多くの知り合い、地域の人々、そしてその背後には多くの匿名のフィリピン人たちが同じゲームに参加しており、それが国民的な賭博空間となっていることにこそ、このゲームの特徴があるのではないか。

とはいえ本書には、著者自身の賭博者の生への熱い思い、フィールドの具体的な描写や人々の語りの臨場感があふれ、同時に人々の語りと実践を人類学的に掘り下げた考察も迫力がある。フィリピンにおける賭博の歴史や制度、産業の構造などについてのまとまった叙述も明快で、フィリピンの賭博の実態について幅広く明らかにした新規性の強い成果と高く評価したい。フィリピンにおける幸運をめぐる議論の射程は広く、その中で、本書はかなめの一つである賭博の実践についての研究を切り開いた魅力的な成果であり、今後も広く参照されるであろうと考える。

(宮脇聡史・大阪大学大学院人文学研究科)

引用文献

- 細田尚美. 2019. 『幸運を探すフィリピンの移民たち——冒険・犠牲・祝福の民族誌』東京：明石書店。
- Bulatao, Jaime. 1965. Split-Level Christianity. *Philippine Sociological Review* 13(2): 119–121.
- Lynch, Frank. 2004. Folk Catholicism in the Philippines. *Philippine Society and the Individual: Selected Essays of Frank Lynch*, pp. 207–218. Quezon City: Ateneo de Manila University.

小泉佑介. 『熱帯フロンティアへの移住と開拓——インドネシア外島の農園開発に伴う地域変動』東京大学出版会, 2023, viii+247p.

1980年代以降、インドネシア・スマトラ島のそれまで人口過疎地であった周縁部ではアブラヤシ農園が爆発的に拡大し、並行してアブラヤシ栽培に従事する人びとの移住が行われた。ある者は企業の経営するアブラヤシ農園に雇用され、またある者は個人農園の所有者を目指し、新たな土地へと移住した。本書はインドネシア外島のこうした周縁部を「熱帯フロンティア」と位置づける。そのうえで、スマトラ島東岸部のリアウ州に暮らすアブラヤシ産業に携わる国内移住者を研究対象としながら、いかにして熱帯フロンティアが人びとを惹き付けてきたのかを多角的に分析している。

序章では書籍全体の議論の枠組みが提示される。著者はまず「熱帯フロンティア」という用語を、1980年代から90年代にかけて京都大学東南アジア研究センターを中心に展開されたフロンティア論に依拠して定義し、自然地理的および社会的側面の双方からその特徴を明らかにする。ここで「熱帯フロンティア」は集約的な水稻耕作を基盤とする「農村」と対置され、そこでは土地に縛られない自由な社会的雰囲気や移住・開拓が一種の「賭け」として行われている様相が強調される。続いて、インドネシアにおけるアブラヤシ産業の特徴が解説され、企業経営の大規模農園と個人経営の小規模農園の相違が整理される。さらに、本書を貫く分析枠組みとして、ポリティカル・エコロジー論（PE論）が導入され、マクロ、メゾ、ミクロといった複数のスケールを統合的に扱う分析の重要性が示される。

第一章はスマトラ島を中心にインドネシア外島で農園開発がいかに拡大したのかを歴史文献と作物統計データを用いてマクロ・スケールから検討する。スマトラ島の農園開発はオランダ植民地期である19世紀後半のタバコ農園に端を発し、20世紀前半のゴム栽培の隆興を経て、独立後の1980年代以降にはアブラヤシ農園が急拡大した。この急拡大の大きな原動力になったのは、土地なし労働者や貧困農民へ土地分配し国営企業の指導管理の

もと彼らに小農園を経営させる国家プロジェクト——中核企業—小農方式 (Perusahaan Inti Rakyat, PIR プロジェクト)——であった。アブラヤシ農園は北スマトラ州を起点としてリアウ州など近隣州、さらには他島へと拡大していく。1980年代中盤以降、国営企業の役割は民間企業へと移行し、その支援のもとで自立的な個人農園が増加する。結果、現在では個人農園の面積が企業農園を上回る州も出現している。本章は歴史文献のほか農業省が発行した作物統計データをもとに、図表や地図を駆使してアブラヤシ産業の動向を可視化しており、資料的価値が極めて高い。

第二章は2000年と2010年の人口センサス個票データに基づいて、リアウ州の出生地・民族構成と産業別就業構造の関係が定量的に明らかにされる。リアウ州は、歴史的に西スマトラ州からのミナンカバウ移住者を多く受け入れてきたが、1980～90年代には政府主導のトランスミグレーション政策によりジャワからの移住者が増加した。1990年代以降には、北スマトラ州から企業農園で働いた経験を持つバタック、ジャワ、ニアスといった人びとが流入し、アブラヤシ産業を支える主力となった。こうしたアブラヤシ産業には、1980年代以前に移住してきたジャワや在地のリアウ・ムラユも参加している。リアウ州で現地調査をしていると北スマトラ出身者やジャワ人とアブラヤシ産業との深い係わりについて見聞きするが、地方自治体から得られる情報は断片的で、統計データの信頼性は高くない。著者は信頼性の高い全国センサスを駆使し、リアウ州における民族構成と産業構造の変化を定量的に示しており、その学術的貢献は大きい。

第三章と第四章では、それぞれシアク県L村とロカン・ヒリル県のB町を調査地とし、村落部での聞き取り調査に基づくミクロ・スケールの分析が行われる。サンプリングされた移住者世帯 (L村160世帯、B町56世帯) を対象に、移住時期や移住当初の就労状況、農園面積の拡大過程を分析し、早い時期の移住によって安価な土地を購入してきた世帯や、追加の拡張資金を確保できた世帯が個人農園主として大きく成功したことを指摘する。第五章は両地域の移住者のライフヒストリーを描き出し、アブラヤシ産業の隆興のもと、移住者が

どのようなプロセスで生計を確立させ個人農園を所有するに至ったかを明らかにする。これらの章は現代のリアウ州非都市部の社会経済構造とそこに暮らす人びとの背景を理解するうえで、極めて貴重な資料である。第六章と終章では総括が行われる。

本書で提示される豊富なデータと詳細な考察は、インドネシアの主要産業たるアブラヤシ産業の拡大や1980年代以降の国内移住者の動向を理解するうえで重要な意義をもつ。しかしいっぽうで、全体を統合する分析枠組みと各章の議論の接続はバランスを欠いており、読んでいて戸惑いを感じた。

第一の問題は全体を貫く分析枠組みとしてPE論とマルチ・スケール分析を設定したことの妥当性についてである。PE論の核心である生態学的な知見との接続が十分ではない点は著者自身が終章で今後の課題として認めている。またマルチ・スケール分析のメリットを強調しながらも、リアウ州内の県レベルの比較分析が十分に行われていない。リアウ州は北海道を超える広大な面積を有し、各地域の自然環境や社会文化的な背景は多様である。県レベルの比較分析を導入すれば、マクロやミクロの分析からは見えにくい熱帯フロンティアが人びとを惹きつける要因がより明確になっただけである。これらの作業がなされていないなかで、序章でPE論やマルチ・スケール分析をことさらに強調する必然性があったかという点には疑問が残る。

第二の問題は熱帯フロンティア概念の扱いである。著者は30～40年前の研究者たちが提唱した概念を踏襲して現代リアウ州を説明しているが、現在のリアウ州は過去のフロンティア像とは大きく異なる。著者自身が描き出した通り、1980年代以降同州ではアブラヤシ農園が爆発的に拡大し多数の移住者が流入、人口は増大した。それに伴い、交通網は周縁地まで行き届き、それまで広く存在した所有者があいまいな土地空間は姿を消していった。結果、不法占拠や地域共同体との口約束によって自由に開拓できる土地空間はほとんど消滅し、かつて辺境域であった土地空間においてもアブラヤシ園の造営を目的とする土地売買が盛んに行われている。このような土地利用の急激な変

化を真剣に受け止めるならば、本書に求められるのは現状の姿を既存の概念の中に押し込めようとするような考察ではなく、熱帯フロンティア概念を再検討し拡張し更新していくような議論ではなかったか。

第三に、著者は移住の目的や動機を「賭け」と総括しているが、これは著者自身の描写分析と矛盾した過度に単純化された比喩に見える。著者による「賭け」の議論は、熱帯フロンティア論の提唱者である田中耕司と古川久雄の主張を踏襲するものであるが、彼らの研究はいずれも生態学的側面に焦点を当てており、住民の行動や意識を実証する語りや事例の描写は限定的である。いっぽう著者は第五章を中心に聞き取り調査に基づく移住者のライフヒストリーを描いている。そこから読み取れるのは、移住の動機や目的はきわめて多様であること、そしてその後数十年にわたりひとつの土地に定住しながら手許の資源やネットワークを活かして生計を安定させてきた人びとの姿である。著者が調査した移住者は、一発勝負をして失敗したらまた次の土地に移って勝負を行うような刹那的な「賭け」をしてきたのではない。ひとつの場所に定住し、生計を成り立たせるためにさまざまな戦略をとりながら試行錯誤してきたのである。こうした事実は旧来の熱帯フロンティア論を補強するものではなく、むしろ再考を促すものとして扱われるべきだろう。現代の熱帯フロンティアのリアリティは、移住者が人生を賭けて勝負を行う自由な雰囲気ではなく、むしろ多様な動機・目的と複雑な過程が最終的にアブラヤシ農園での労働や経営へと収束していくことにあるのではないか。

さらに言えば、本書は成功した移住者に焦点を絞ってマイクロレベルの分析をしているが、熱帯フロンティアにおけるアブラヤシ農園の拡大の全貌を描くには、やはり在地民や1980年代以前の移住

者、土地なしの移住者、さらには都市中間層の調査研究も必要であろう。リアウ州の在地民の共同体では、慣習的に管理利用してきた領域の境界域にアブラヤシを導入し、既存のゴム栽培や漁業といった他の生業と組み合わせながら新たな生業体系を作り上げることが模索されている。そうした在地民は、栽培の失敗や現金の必要性から土地をしばしば売却する。いっぽう都市中間層は、投資を目的として周縁地域のそうしたアブラヤシ園や古いゴム園を買い取り、土地なし移住者を労働者として雇い入れてアブラヤシを栽培、分益小作で収入を得ている。自由に開拓できる土地空間はほぼ失われたが、リアウ州の周縁部は依然として急速な変容の只中にある。こうした状況を、しばしば実在性が疑問視される閉鎖的な「農村」と対置するのではなく、資源搾取後の放棄地や武装勢力の支配地域など世界中の諸フロンティアの現況を考慮しながら、東南アジア島嶼部における「ポスト熱帯フロンティア」の可能性を検討する余地があったように思われる。

以上のように、本書の各論は価値の高い地誌的情報に溢れており、それぞれのデータや議論は素晴らしい充実を示す。いっぽう、全体を統合する総論については大きな課題を残す。とはいえ、これまでほとんど研究がなされてこなかったアブラヤシ産業に関わる移住者を本格的に研究対象とし、マクロとミクロ、量的・質的両面から多層的に分析を試みた意義は大きい。こうしたアプローチは地域研究の手本ともいべきものであり、インドネシアの一大産業たるアブラヤシ産業に対する今後の比較研究や地域横断的な研究を促す起点となりうる。今後、生態的要素との接続や在地民や都市居住者についての研究を含めた、より包括的な視点から現代における「熱帯フロンティア」の再定義が進められることを期待したい。

(大澤隆将・金沢大学国際基幹教育院)